

「もの」の本義について

奥田 智樹

1. はじめに

日本語の形式名詞についてはその分類を認めるか否かも含めてこれまでに数多くの議論がなされてきた。形式名詞についての最も一般的な定義づけとは、例えば次のようなものである。

「名詞のうちの特異な一類で、意味が抽象的・形式的になっていて、独立しては使われず、具体的・実質的な意味を補う修飾語を伴って使われるもの。(以下略)」

『日本語学研究事典』明治書院 2007

この形式名詞は日本語に特有の名詞でいずれも極めて抽象度の高い概念を表している。これらについての議論の難しさは、例えば寺村(1978)の「その意味的多様さが、構文機能の多様さと相関しているところにその特質があり、本質的に品詞論のレベルで扱い切れない問題を含んでいる。」という記述から読み取ることが出来る。つまり分析が必然的に意味論と統語論の両方に跨らざるを得ないため、一貫した固有の価値や機能を見出すことが困難であり、例えば概念の抽象度が高いとは具体的に言うときどうということなのか、また意味的多様さや構文機能の多様さはどのようなことから生じているのかといったことが明確にしにくいのである。

本稿はこうした形式名詞の本義を特徴付ける試みであり、考察の対象として「もの」を取り上げる。「もの」は最も代表的な形式名詞の一つであり、様々な形式名詞の本義を捉えるための方法論上の出発点となり得ると考えるからである。「もの」については、従来「こと」との対比や、実質名詞としての用法から助動詞としての用法への移行を論じた先行研究は数が多いが、「もの」に一貫している

本義とは何かについて積極的に論じた論考は少ないのではないと思われる。ここでは「もの」について先行研究の知見を援用しながら、その用法がどういった点に集約されるかについて考えたい。具体的には「もの」の様々な用法を概観することから始め、「もの」について重要な二つの特質を導き出し、それを集約する方向で論を進めていく。なお、本稿で論ずる「本義」とは特定の何らかの用法を指すものではない。そもそも「もの」の多岐にわたる用法の中で、中心的なものはどれか、派生的なものはどれかを定めることは原理的に不可能であろうと思われる。本稿における「本義」とは、そういった個々の用法とは一応別個の「もの」という語の特質のことである。

本稿は「もの」という語について先行研究に異を唱えたり、新たな用法を提示したりするものではない。しかし、従来個々の用法の分析に偏りがちだった「もの」の研究になるべく一貫した記述の軸を与え、「もの」を統合的に捉えるための一助となればと思っている。

2. 「もの」と「こと」についての先行研究

まず「もの」を「こと」との対比において考えてみよう。「もの」と「こと」は指示する意味や内容が対比的であって、両者が補い合って「物事」という形で日本語の世界の基本的な認識概念を形成している。これらの違いについては、多くの言語学者や哲学者の間で議論がなされてきたが、ここではそれぞれに特徴的な二つの先行研究を援用しながら、なるべく言語に即して考えることにする。

寺村(1981)では、「もの」と「こと」の使い分けを説明する上で、「具体的」と「抽象的」という対立を出発点としてそれを掘り下げる形で論を進めている。「もの」は一般に具体的であり、「こと」は一般に抽象的であると考えられる。寺村(1981)はこの具体的と抽象的ということの内実を観察しようとして、「もの」、「こと」が実際にはどんな言葉を指して用いられているかを確かめるために、「Xは...もの／ことだ」という形の様々な例を収集して、このXにどんな言葉が来ているかに注目している。そしてその結果、「もの」は「石」や「太鼓の音」や「ビール」のような五官で捉えられる、問題なく具体的と認められる対象だけでなく、「運命」、「波瀾」、「批評」、「言葉」、「情欲性、肉欲性」のような、目で見えたり手で触ったりできる物理的な存在物とはいえない対象も指すことが出来ることを示している。寺村(1981)によれば、この後者も個別的にそこに存在していて、しかもそれが確かめられるという意味では「具体的」な存在と言えるものなのである。

そして、「石」や「太鼓の音」や「ビール」などのように五官で知覚されるものを「物理的な具体的存在」と呼んでいるのに対して、「運命」、「波瀾」、「批評」などは、それぞれの文脈、状況での特定のそれらであるという限りにおいて「心理的な具体的存在」と呼んでいる。「もの」という言葉はこの両者のいずれも指すことができるということである。

これに対して「こと」が指すことができる対象(「X は...ことだ」の X に来る言葉)は、「借金を返すための借金」、「コッホがエジプトの[コレラの]流行に際してコレラ菌を発見したの」、「かの一日一夜を外で明かしたいきさつ」、「結婚式のために新郎を家におかないで外出させてしまう習慣」などである。寺村(1981)によればこれらはいずれも「文章態」あるいは「命題的内容」で表されるものであり、そのことから寺村は次のように述べている。

「コトの対象は、命題で表されるような内容や、動詞、形容詞で表わされる動作、作用、変化、状態、属性などを一般的に概念として表したもの、である。モノが個別的であるのに対してコトは一般的、モノが感覚(五官)ないしそれに準ずる心理作用によって把握される対象であるのに対して、コトは思考によって把握される対象、発話や知識の内容である、というように対置できるかと思われる。」

寺村(1981)は言語に非常に即した分析であり、「具体的」と「抽象的」という区別を掘り下げる形で考察を進めているので、最終的な結論もその区別に即したものになっている。「もの」についての「物理的な具体的存在」と「心理的な具体的存在」という区別は、厳密さは別として、直感的には分かりやすい。ただ、寺村(1981)は「もの」についての考察が中心で、「こと」はあくまでも「もの」と対比する形で論じられているが、そもそも、「X は...ものだ」の X には抽象的な概念を持つ名詞も含めておよそどのような名詞でも来られるので、むしろ「X は...ことだ」についてさらに詳しい分析が必要ではないかと思われる。

一方、原田・小谷(1992)は「もの」と「こと」の区別について主に日本語教育の立場から論じている研究で、「もの」と「こと」の違いについて次のように述べている。

「「もの」とは不変的存在物であり世間でのありかたである。そして、その存在物や

ありかたには一定の規範論理が貫かれている。この時間的に不変な存在物は、具象物が時間的に不変であり恒常的であることと通じている。(中略) 一方、「こと」で表現された文の場合には、その事柄は生成変化し不動ではない一事象の話者の経験を示しているのであり、その意味では可変的な性質の事例である。」

原田・小谷(1992)によれば、「もの」と「こと」の大きな違いは、「もの」が時間に関わりなく不変であるという観点に立っているのに対して、「こと」は時間の経過に伴い変化するという観点に立っているという点にある。このことを踏まえて、原田・小谷(1992)は次の(1)~(4)の例文を取り上げて、「もの」と「こと」の違いについて考えている。これらの例文では「もの」と「こと」の両者が使用可能だが、「もの」が用いられた文 a.と「こと」が用いられた文 b.には話者の意識の差が見られると述べている。

- (1) 数学の分野では、基礎的な計算力がどんなに大切な {a. もの / b. こと} であるかがよく知られている。
- (2) 彼の元気のなさをみれば、あの出来事が彼にとってどんなに大変な {a. もの / b. こと} であったかがわかる。
- (3) 病気で一日中寝ているのがどんなに辛い {a. もの / b. こと} であるかは君のような健康な人間には理解してもらえないだろう。
- (4) 私にとって、妻の死がいかに辛い {a. もの / b. こと} であったかは誰にも想像できるまい。

(1)を例にとって考えると、a.では「もの」が「基礎的な計算力」を指していて、一方b.の「こと」は「基礎的な計算力がある／を持つ」という叙述内容を示している。また、「こと」を用いる場合は、話者はその事象が時間の経過に伴って変化するという前提に立っている。従って、「もの」を用いた場合には「基礎的な計算力」が「不変的な存在、数学の分野で大切な本質」であることが示されるのに対して、「こと」を用いた場合は「基礎的な計算力」が「その時点での一回的事柄、数学の分野で大切な事柄の中で選択された一項目」であることが示される。このような意味の差異が(2)~(4)にも当てはまる。つまり「もの」で表現された文の場合には(2)の「大変な」事柄や(3)、(4)の「辛い」事柄が話者にとって不動な存在となっていることが感じられ、そのために(2)の「あの出来事」や(3)の「病気で一日中寝て

いること」や(4)の「妻の死」が持っている悲観すべき性質をも暗示することになる。一方、「こと」で表現された文の場合には、その事柄は生成変化し不動ではない一つの事象についての話者の体験を示していることになって、その意味では可変的な性質の事柄と捉えられる。

次の(5)～(7)の例文は、話者がある一つの事象を、一旦は「こと」として表した後、次に、「もの」として把握しなおして、二度目には「もの」として表しているものである。

- (5) どの観光地も紙屑や空き缶で美観が損なわれているということは、観光客の公德心の欠如を示すものである。
- (6) 今回の選挙で投票率が 60 パーセントに達しなかったことは、有権者が政治に対していかに無関心であるかということを示すものといえるだろう。
- (7) 海外旅行者が急増していることは日本経済の成長を端的に物語るものと見てよい。

(5)～(7)の文はいずれも「A ということは、B(～を示す／物語る)ものだ」という文型によって表される。これらの文は話者がまず「こと」として把握して、それからそれを「もの」として不変の対象に定着する認識過程として理解することが出来る。言い換えれば、話者がまず生成変化する事象として捉えた「こと」が、不変の対象である「もの」として定着するということである。これらの例ではいずれも「こと」と「もの」を入れ替えることは出来ない。

このように原田・小谷(1992)は「もの」と「こと」の違いを時間に伴う可変性と不変性という点に認めている。このような説明は認知言語学的な観点に立つものを中心に数が多い。¹⁾ただ、これも実際に現実において可変的か不変的かというよりは、可変的なものとして捉えるか、不変的なものとして捉えるか、という捉え方の問題であると言える。例えば「人は必ず死ぬこと」、「水は 100 度で沸騰すること」のようないわゆる不変の真理は、時間的に不変であっても全て「こと」の形で表される。

以上、「もの」と「こと」に関する二つの先行研究を概観したが、これらから「もの」について二つの重要な特質が読み取れると思われる。つまり、「もの」とは寺村(1981)によれば具体物、抽象物をいずれも内包する上位範疇であり、また原

田・小谷(1992)によれば時間の経過に関わりなく、不変なものとして捉えられる概念なのである。以下では、「もの」について、実質名詞としての用法から助動詞としての用法へどのように用法が拡張されていくかを観察しながら、上位範疇と時間的な不変性という二つの特質とこの拡張のプロセスとの関連について考えたいと思う。

3. 実質名詞としての用法

「もの」の実質名詞としての用法では、時間的な不変性という点は比較的分かりやすいと思われるので、ここでは上位範疇という点に特に注目する。「もの」は実質名詞としてはまずいわゆる「物体・物品」の意味で用いられる。次の(8)～(10)がその例である。この場合(8)や(9)のように連体修飾語を伴わずに単独で用いることもあり、また(10)のように連体修飾語を伴って用いられることもある。

- (8) ものとものとがぶつかる音がする。(山口(200))
- (9) おなかをこわして、ものが食べられない。(同上)
- (10) 昨日買ったものの中に、不良品がある。

これらの例では文の前後関係や連体修飾語によって、「もの」が何らかの「物体、物品」の意味で用いられていることが理解される。この場合、それがどのような物体や物品かを特定するものは前後の文脈や連体修飾語だけである。例えば(8)の場合は固体であって、一般には何か固いもの、(9)の場合には食べ物であると考えられる。

- (11) a. ?? 子供にものを与えてください。
- b. 子供にものを与えないでください。
- c. その父親は毎日子供にものを与えて、甘やかしていた。

この(11)a.が不自然なのは、この文によって特定される物体や物品の範囲があまりに広く、聞き手(依頼される側)には何が問題になっているのか不明瞭だからである。しかし、(11)b.のように否定形にすれば、その「もの」の内容が問題にならなくなるので容認度が上がる。また、(11)c.のように「もの」が文脈によって限定される様々な物品の集合を指す場合には日本語としてより自然になる。こ

これらの例から、「もの」という語は、あらゆる物体や物品に対する上位範疇として用いることが出来ることが分かる。

ここで寺村(1981)にならって、「X は...ものだ」という言い方について考えることにする。

- (12) このりんごは、産地から直接送られたものだ。(原田・小谷(1992))
- (13) あの机は、谷崎潤一郎が愛用したものだ。(同上)
- (14) このネクタイは、昨日買ったものだ。
- (15) 大和魂はどんなものかと聞いたら (夏目漱石『吾輩は猫である』)
(山口(2000))
- (16) 鼠を捕るのは思ったよりむずかしいものである。(同上)

この X の位置には(12)、(13)、(14)のような「物体、物品」だけでなく、(15)、(16)のような抽象的な概念を表す名詞(節)も来られる。これはそれぞれ寺村の言う「物理的な具体的存在」、「心理的な具体的存在」に相当すると思われる。(12)、(13)、(14)では「もの」が X の代理名詞的に用いられていると考えることも出来るが、それよりは「連体修飾語+もの」が X の上位範疇を構成していると考えの方がより妥当であると思われる。(12)について言えば、「このりんご」=「産地から直接送られたもの(りんご)」ではなく、「このりんご」が「産地から直接送られたもの」に含まれるという関係である。(15)や(16)では「もの」を X で置き換えることは出来ないので、「もの」は X の上位範疇であるという考え方がよりはっきりする。

また、「X というもの」という言い方も「もの」の上位範疇としての性質を裏付ける。

- (17) a. {鉛筆・新聞・大学・食べ物・テレビ} というもの
- b. {事実・結果・運命・習慣・歴史・可能性} というものはすぐには
 わかりませんよ。(原田・小谷(1992))

(17)a.はこの X に実質的で具体性を持つ名詞が来る場合であり、(17)b.はこの X にいわゆる「事柄」を表す名詞(元来は抽象概念である名詞)が来る場合である。つまり名詞であれば、その語の意味内容が具体的と抽象的のいずれであるかに

かかわらず、全て「X というもの」と「もの」の語で一括できるのである。一般に「X という Y」という言い方では、「プードルという犬」、「犬という動物」、「動物という哺乳類」、「哺乳類という生物」のように X は Y に属するもの、あるいは下位範疇であり、この行き着く果てに「もの」があると考えることが出来る。従って、このことから「もの」が様々な名詞の中で最も上位の範疇を表す語であると言えるのである。

次の(18)と(19)は「もの」を含む慣用句であるが、この両者には「もの」の表す意味内容の点で違いがあると思われる。

- (18) ものに例える / ものは試した / ものには順序というものがある / (ものに憑かれる)
- (19) ものになる / ものにする / ものを言う / ものの数にも入らない / もののともせず / ものが分かった人

(18)は全ての存在物に相当する「もの」の用法であり、この場合の「もの」はあらゆる物事というような意味で理解することが出来る。これに対して(19)は価値のある存在、場合によっては規範となる存在といった意味を持つ「もの」の用法である。例えば「この子は画家としてもものになりそうだ」と言うときの「もの」は画家という性質が安定していて不変であることを示唆している。(18)は上位範疇としての捉え方、(19)は時間的に不変なものとしての捉え方と言える。

4. 「ものだ」の表現機能

次にこの「もの」が持つ上位範疇と時間的な不変性という性質が、「ものだ」という形で助動詞的に用いられるようになる際にどのように関わっていくかについて考えたいと思う。揚妻(1991)は次の2つの文を比較している。

- (20) a. このケーキ、とてもおいしいから、ひとつどう？
b. このケーキ、とてもおいしいものだから、ひとつどう？(揚妻(1991))

揚妻(1991)によれば、(20)a.の場合にはこのケーキが「おいしい」という判断は話し手自身が下している。それに対して(20)b.の場合には、このケーキが「おいしいもの」という上位範疇に含まれることが示されており、しかもそれは時間的

に不変であるため、このケーキが「おいしいもの」というのはこのケーキがもともと持っている属性として捉えられている。すなわちこの場合には、「ケーキがおいしい」という概念は、発話時に話し手が判断する以前に、すでに客観的に既定であるということになる。このことから「ものだ」がここで果たしている機能は、「ケーキがおいしい」という概念を客観化して既定化することだと言える。次の(21)a.b.についても同様の議論がなされている。

- (21) a. 鎌倉の大仏って、大きいなあ。
 b. 鎌倉の大仏って、大きいもんだなあ。(揚妻(1991))

(21)a.は鎌倉の大仏を見て率直に驚いた表現であるが、(21)b.は改めて驚いたという「再認識」のニュアンスがある。(21)b.の「大きいもの」は時間の経過とともに変化しない属性、つまり話し手が発話時に判断する以前に客観的に既定された属性を表す。つまり(21)b.は単に鎌倉の大仏が大きいと知っているのではなく、客観的に確かに鎌倉の大仏が大きい、ということを確認した驚きを表しているのである。このような、ある対象にある属性が存在するということを改めて認識するという性質が、以下の形式化した「ものだ」に連なっていく。

「ものだ」のこういった性質が最も顕著に現われているのが、(22)～(24)のようなある対象の本性や本質を述べる表現である。(24)は本性規定とも事実の再認識とも解釈可能である。これは助動詞に相当する「ものだ」のうち最も使用例が多い用法である。(以下、例文は主に吉川編(2003)による。)

- (22) 骨董はいじるものである。一方、美術は鑑賞するものである。
 (23) 人間というものはいつかは死ぬものである。
 (24) 「初めてのデートというものはとても緊張するものだ。」

これらの例は先の(12)～(16)の例と同じように「X は...ものだ」という形を取っており、「...もの」がXの上位範疇であるという考え方がまだ可能である。ただ、これらの表現は客観的な事実として述べる体裁をとっているが、実際にはその対象をある特定の観点からのみ特徴付けようとしている点で、話し手の主観が強く現われている。そのことから、この言い方は(25)～(27)のような、その対象のあるべき姿、話し手が理想と考える主張を述べる当為表現にしばしば移

行する。

- (25) 男というものは痛いことや苦しいことを人に見せないものだ。
 (26) 自分の後始末は自分でつけるものだ。
 (27) 「(君は)少しは真面目にひとの話を聴くものだよ。」

この当為表現も普遍的な事柄や社会常識から判断した一般論として述べる点は本性規定と共通である。

なお、(22)～(27)はいずれも(12)～(16)と同じ[[X]は[[〈修飾語〉]もの]だ]という形で図式化される構造を持っていて、先の〈修飾語〉対〈被修飾語としてのもの〉という関係をまだ認めることが可能である。これらは「説明対象—説明」という構造を持ち、〈修飾語〉はその説明の部分に相当している。

しかし、この「ものだ」の助動詞化がさらに進むと、[[〈修飾語〉]もの]だ]という形で図式化される構造を持つようになる。これは一つのことから全体が〈修飾語〉を構成し、そのことがらの存在や成立を述べるものである。

まず、「ものだ」が現在ではなく過去の事実を再認識する場合に用いられると、次の(28)、(29)のような「回想」を表す用法になる。この場合、回想の対象となるのは必ず習慣性の行為や出来事である。

- (28) ホームステイ先では、その家の子供達と冗談を言い合ったり、ふざけ合ったりして、楽しい時を過ごしたものだ。
 (29) 学生の頃、よくこの界限を飲み歩いたものだ。

また揚妻(1991)によれば「客観的にある対象にある属性が存在するということを認識するには、観察する側でも、瞬間的ではなくて、ある心理的な時間の長さが必要」になる。この話し手の心理的な持続性という方向で形式化が進むと、次の(30)～(32)のような「詠嘆」や「願望」を表す用法になる。この場合、詠嘆の対象は多くの人々が共有できる普遍事実や真理である。

- (30) 「月日のたつのは早いものだ。」(詠嘆)
 (31) 「何でもやれば出来るものだなあ。」(詠嘆)
 (32) 「いつか自分の家を持ちたいものだ。」(願望)

(32)は話し手が自分の願望を誰もが持ち得るものとして、あるいは自分の長年の夢として述べているのに対して、単に「いつか自分の家を持ちたい」と言えば、話し手は自分の願望を自分個人の一時的な感情として述べていることになる。

次の(33)、(34)のような「驚き」を表す用法も、客観的に存在する事実を対象としている点では「詠嘆」の用法と共通している。

(33) 「いやあ、呆れたもんだねえ。」

(34) 「よくそんなことが言えるもんだな。」

当為表現にしても「詠嘆」にしても、「ものだ」の前に述べられている事柄を普遍的な通念として捉えているが、普遍的通念というものは話し手が発話時に判断する以前に客観的に既定されたものである。その点で、先に述べた「もの」の性質と通じていると言える。

ここで、本論で「もの」について重要な意味的特質として掲げた二つのこと—上位範疇と時間的な不変性—の関係について考える。「もの」が様々な名詞の中で最も上位の範疇を表す語であるならば、「もの」は意味論的には名詞で表される全ての概念を内実を含む集合であると考えられる。そうであるならば、「もの」に特有な時間的不変性とは、この意味的内実の稠密さから生じるものではないだろうか。この稠密さが意味的に安定したものと感じられるのであり、既定性の解釈もそのことから生じるのである。従って、「もの」が極めて抽象度の高い概念を表すことは事実であるとしても、それは意味が希薄であることを意味しているのではない。実際にはその正反対で、「もの」は意味論的には非常に密度の濃い内実を持っていると言えるのである。そのため、先に「もの」の実質名詞としての用法から助動詞としての用法への拡張について述べたが、この過程は決して意味の希薄化を伴うものではなく、「もの」の持つ意味的な内実は全ての用法で不変なのである。

最後にここまでの議論では触れることが出来なかった「もの」の用法のいくつかについて、この意味的内実の稠密性との関連性を見ておきたい。AOKI(1994)は次のような表現を取り上げて、これらにおける「もの」は全て、複数の事象が

成立する可能性がある状況で、他の事象が成立する可能性を排除して当該の事象だけを選択するという言語操作を担っているという主旨のことを述べている。

- (35) 僕は彼が帰ってくるものと信じている。
 (36) だって、行きたいんだもの(もん)。
 (37) 出来るものなら助けてあげたい。(cf. 出来るなら助けてあげたい。)

すなわち AOKI(1994)によれば、(35)は「彼」が出かけたきり帰ってこないのではないかと近親者たちが心配しているような状況で用いられるが、この場合の「もの」は様々な意見がある中で話し手は「彼が帰ってくる」という立場を選択して他を排除していることを示し、話し手の確信の強さを強調している。同様に(36)の「もの」は話し手が聞き手からの反論の可能性を排除して自らの立場を確固たるものとするために用いられている。(37)については、「出来るものなら」は「出来るなら」よりも非現実の意味合いの度合いが高い。これは、仮定というのは本来二つの事象の可能性が矛盾なく両立することが前提となるが、「もの」によってこの前提が排除され一つの可能性しか考慮されなくなるために、話し手の見地からは仮定を立てること自体が不可能になる。そのため非現実の解釈が生じるのである。

この議論は言語操作に関わるものであり、独自の発話理論を基盤として持っているため本稿での議論と単純に結びつけることは出来ない。また、「もの」によって選択される当該の事象が(32)と(33)では「もの」に前接する動詞によって表される事象を指しているが、(34)ではそうではないようで、この点がやや不明瞭である。しかし、この議論で示されている「もの」の性質も先に述べた意味論的な稠密性の一つの帰結として理解することが可能ではないかと思われる。すなわち、稠密な集合の持つ安定性が場面や状況によって話し手の確信の強さや揺るぎなさといった解釈を生むのである。

本稿で述べてきた「もの」の意味的内実の稠密さやそのことから生じる意味的な安定性というのは、ある程度直感的にしか捉えられないものであることは否めない。しかし、その概念をなるべく個々の例に即して帰納的に論じてきたつもりである。

さて、「もの」について富士谷成章は『あゆひ抄』の中で次のように記してい

る。

「何事をもさして物と言ふは、たとへば、よろづのもののかたち・ことわり定まりてゆるがすべからぬにたとへなして言ふほどの心なり。」

この記述は直感的なものではあるが「もの」の本質を的確に言い表していると思われる。本稿で行った「もの」についての議論は、この記述を個々の場合に応じて具体的な例に即して掘り下げようとする試みに相当する。今後は、本稿で触れなかった接続助詞や終助詞としての用法や、様々な慣用表現に含まれる場合についても本稿での議論を適用する方向で、「もの」の全体像についてさらに考察を深めたいと思っている。

注

- 1) 例えば大野(1974)、森田(1980)、山梨(1995)など。

参考文献

- AOKI Saburo (1994): « Nom de chose, détermination et énonciation : à propos du nom formel *MONO* en japonais », 『日仏語対照研究論集』, 日仏語対照研究会, pp.134-148.
- 揚妻祐樹 (1991): 「実質名詞「もの」と形式的用法とのつながり」, 『東北大学文学部日本語学科論集』 1, pp.2-12.
- 大野 晋 (1974): 『日本語をさかのぼる』, 岩波書店.
- 寺村秀夫 (1978): 「「トコロ」の意味と機能」, 『語文』 34, 大阪大学国文学研究室, pp.10-19.
- (1981): 「「モノ」と「コト」」, 『馬淵和夫博士退官記念 国語学論集』 大修館書店, pp.743-763.
- (1984): 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』, くろしお出版.
- 原田登美・小谷博泰 (1992): 「日本語「もの」と「こと」」, 『甲南大学紀要 文学編』

84, 甲南大学, pp.1-34.

森田良行 (1980): 『基礎日本語』, 角川書店.

山口佳也 (2000): 「「もの」の用法概観」, 『私学研修』 154-155, 財団法人私学研修福社会, pp.104-117.

山梨正明 (1995): 『認知文法論』 ひつじ書房.

吉川武時編 (2003): 『形式名詞がこれでわかる』 ひつじ書房.